

「応用哲学・分析アジア哲学プログラム参加報告書」

京都大学文学研究科2年 佐々木 尽

本派遣プログラムに参加し、台湾で3つの大学（政治大学・陽明大学・清華大学）を訪問したが、大きなハプニングも無くプログラム完了、帰国にいたったことをまず記しておく。以下、①海外での経験、②プログラム内容、③学習成果、④進路への影響、の四点について、簡潔に報告する。

① 海外での経験

昨年度に実施された同プログラムに参加していたので、台湾は二度目の訪問であった。昨年度は台北一週間、新竹一週間の合計二週間であったが、今回は合計一週間であった。そのため昨年度に比べ、滞在先の方々とのお話を簡潔に、濃密にする、という明確な目的のもと、有意義な交流を行うことができた。昨年度の派遣において知り合っていた方が多かったことも幸いして、時間が短いながらも、専門分野である哲学の話、台湾の文化の話など、たくさんの交流を図った。

② プログラム内容

一週間のうち、三日は新竹、残りの四日が台北、という日程であった。

新竹の清華大学では、学生だけが集まって自らの専門分野を発表する、という機会が設けられ、それぞれの学生が10分程度の発表・質疑応答を行った。与えられた短い時間の中で自らの専門の話をする、ということの難しさを再認識する良い機会となった。

同じく清華大学で、日本語授業に参加して学生交流を図った。昨年度に驚いたことであったが、学生の日本への興味・関心の大きさは、日本人の他国へのそれと比較にならないほど大きい。

続いて台北で、まずは政治大学を訪問し、カンファレンスに出席した。アジア哲学の名の下、仏教や儒教といった、筆者が日頃あまり触れることのない領域の哲学についてのカンファレンスであった。だがもちろん、哲学的には西洋哲学との共通点を見つけることができる。広い視野で哲学を眺める機会を提供してくれる、という意味でアジア哲学の研究の必要性を再認識した。

最後に陽明大学でカンファレンスに出席した。こちらは政治大学とは異なり、アジアに限定することのない哲学一般をテーマとしており、筆者も専門分野であるカントの哲学について発表を行った。特に陽明大学の学生による心理学・神経科学といった観点からの研究は新鮮かつ刺激的であり、大変有意義な時間を過ごした。

③ 学習成果

英語力の向上はまず大きい。単にカンファレンスに出席するだけでなく、交流を図る際にも用いるため、いわゆる「英語漬け」状態である。特に語学は慣れ、とよく言われるが、今回の台湾派遣においてそれを実感する瞬間があった。発音が上手くなったわけでも、語彙が突然増えたわけでもないのだが、日本語での会話と同様に、臆することなく話すことができるようになる瞬間との出会いであった。帰国後、持続するものなのか否かは不確かだが、できるだけ持続させていきたい。今回は陽明大学で発表した、ということもあり、自分の研究成果という意味での成果も大きかったように感じられる。

④ 進路への影響

2015年度は修士最終学年を迎え、年度末に修士論文を提出する予定である。博士課程への進学を希望しているため、今回の派遣は留学を考慮するための良い機会となった。修士論文提出以降は、海外への留学を含めて広く進学先をリサーチする予定である。

今年度は昨年に比べて短い一週間の台湾滞在であったが、昨年にも増して有意義な滞在であった。日頃の研究の進め方、他の分野への関心、進路の選択等、熟考を促すプログラムとなったことは悦ばしい限りである。

最後になるが、本プログラムの主催、運営を頂いたK U A S Uの方々をはじめ、お世話になった方々に感謝したい。